



浦野 光人

副代表幹事
教育問題委員会 委員長

ニチレイ 取締役社長

日本の子供たちの虫好きは、世界の中でも際立っているようだ。東南アジアの国々では、きれいな蝶が無数に羽ばたき、甲虫の類も豊富であるが、子供たちの間で昆虫採集が盛んであるとの話はあまり聞かない。最近知り合った日本通の英国人に虫の話を聞くと、「日本人がトンボを可愛らしく思い、その名前が童謡にまで登場するのは信じられない。英国では“Dragonfly”というようにトンボは皆の嫌われ者だ。またカブトムシに人気があるのも理解しがたい。あの黒光りした身体はほとんどゴキブリと同じでとても触れない」という。

日本の多くの子供たちは、昆虫採集や植物採集を通じて自然との付き合いを深めてきたが、最近では捕虫網を手にするのは稀のようだ。コンピュータゲームを始めとして遊ぶ道具には事欠かないのかもしれないが、それ以上に身近な環境から虫たちが消えてしまったのだ。最大の原因は土地利用の変化であろう。林や原っぱや里山が、そしてきれいな小川や池が無くなり、カブトムシもバッタも蝶も蝉もトンボもアメンボも姿を消すこ

とになってしまった。

こうして自然との物理的距離は遠くなる一方であり、精神的距離感も拡がるばかりである。自然を崇め、自然を愛で、自然に感謝し、自然と折り合うことで成り立ってきた私達の生活にも様々な変化が生じている。将来ある子供たちは自然と対話し、自然を観察する機会に恵まれていない。こうしたことが科学技術立国の基盤を危ういものに行っている気がしてならない。科学技術立国への第一歩は“Study nature, not books!”ではないだろうか。自然に親しむことが子供たちにとって様々な夢への入口になるに違いない。

里山の保存や復活に尽力するNPOの活躍、農業体験や自然観察教室など、様々な取り組みが行われ、物理的にも精神的にも自然との距離を詰める努力をしている方々も決して少なくはない。だが、学校や家庭での現状は捗々しくないのが現状である。まずは自然との距離を各自が認識し、自然に対して素直に「ありがとう」と言える近さに身を置きたいものである。

Contents

巻頭言 浦野光人	自然との距離	001
特集・2006年度夏季セミナー<前編>	活力ある日本社会の構築に向けて	002
リレートーク 芦田昭充	海賊は生きている—魔の海峡マラッカ—	012
委員長インタビュー	日本のイノベーション戦略委員会 小島順彦 社会保障改革委員会 桜井正光	013
経済同友会最前線	日本のイノベーション戦略委員会提言 他	015
同友会スケッチ	2006年7月の記録と9月の予定	019
新入会員紹介	2006年7月21日現在の入退会者	021
私の思い出写真館 中村紀子	私の思い出はいつも青い海と	022